

「MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～⑤」

『最期は家で迎えさせたい』～今、ここでの思いを共感する～

高名 祐美

G さん、60 代男性。膵臓癌末期。これまで、自宅から遠方にある大学病院で治療を続けてきた。終末期を宣告され、自宅近くの病院での療養をと当院へ転院してこられた。

転院翌日の午後、病棟 Ns から連絡。「今日の夕方 5 時に、主治医から家族に病状説明があります。かなり厳しい状況だという内容になります。同席してもらえますか？」と。ソーシャルワーク支援依頼の連絡票はまだ届いていなかった。病状が厳しいとなれば、MSW に求められことはどんなものだろう。Ns からは続けて「家族は家での看取りを考えているようです。そこを踏まえて関わりをお願いします。」

そうか、在宅看取りか・・・ どんな状態なのだろうか。準備をする期間はどれくらい猶予があるのだろうか。家族の思いはどんなふうなのだろうか、覚悟はできているのだろうか。と、様々描いてみる。急がないといけないだろう。事前にカルテから情報収集をと思っていたが、その日は次々と対応しなければならぬことに追われた。カルテを見る時間もないまま、病状説明予定の時間となった。その時点で私が把握していた情報は、G さんは妻と二人暮らし、自宅が当院から近距離にあるというこ

とのふたつだった。

5 時を少し過ぎたころ、病棟 Ns から連絡が入った。「今から先生の説明が始まります」と。大急ぎで、病棟へ向かう。病状説明室へ入ると、医師の前には奥様と息子さん が並んで座っていた。二人とも筆記用具を手にし、メモをとる準備をしていた。

Dr：前医から連絡をいただいていた。昨日こちらにきていただきましたが、先週末ではなかった腎臓の機能が悪くなっています。自分でトイレに行こうとして、立ち上がったら血圧が低下して、一時的に意識を消失しました。もう、立ち上がるのはむずかしくなっています。腹水もかなりたまっています。栄養状態もよくないです。いわゆる終末期です。こちらに来てから、おしっこが全くでていないので、危険な状態です。万が一ということがありうる。今日・明日(亡くなる)ということがありえます。

Dr の一言一言に、「はい」「はい」と相槌をうちながらメモを取っていた妻は、医師の最後の言葉に一瞬表情が固まった。重苦しい雰囲気が、その場を包んだ。少しの沈黙のあと、妻が口を開いた。メモはもう取

っていなかった。

妻：そうですか・・・ そんな状態ですか・・・
もうそんなに悪いのですね・・・

Dr：はい。時間はそんなにかいと。そこでお聞きするのですが。もしも、呼吸が止まったり心臓が止まった時に蘇生処置をするかどうかなんです。なにも処置はしないという方向だと思います。いかがですか。

DNAR（心肺蘇生は行わないこと）の確認だった。こんな瞬間にこうして聴くのだと思った。

妻は即答した。

妻：はい。そうしてください。もう今まで十分がんばってきたので・・・もう、いいです。

長男：（となりで同様にうなづいている）

Dr：わかりました。

最期の時が近づいていることが説明され、DNAR が確認された。残された時間はわずかなのだなと考えていると、一呼吸おいて妻から申し出があった。

妻：家で息を引き取らせたいのですが。もう遅いですか。動かさないですか。

Dr：在宅で看取るということですか？

妻：はい。最期は家で迎えさせたいと思ってここに来ました。病院にいたら、コロナで面会できないです。今なら家族がみんないます。孫にも会わせられます。そばにいらることができます。今からでは遅いですか？今なら家族がみんないるんです。ベッドもポータブル便器もあります。ばあちゃ

んが使っていたものを使います。私は 24 時間、大丈夫です。介護の申請もしました。訪問調査も終わっています。家族みんなで協力します。家で過ごさせたい。お父さんもそうしたいと思っています。

妻は声を詰まらせ、こう語った。長男も親の申し出にうなづいている。妻の夫への思いが伝わってきた。新型コロナウイルス感染予防のため、当院でも患者への面会は禁止されている。主治医の許可がない限り、家族は病室には足を運ばない。「家から近い病院に転院しても、面会できないなら意味がない」「自分の家なら、コロナに関係なく家族で過ごすことができる」「残りわずかな時間は、夫のそばにいたい」そんな妻の思いが伝わってきた。「今なら家族がみんないる」と繰り返す妻には、看取りの覚悟はできていると感じた。この希望をなんとか実現したい、させなくてはという感情が私の中に瞬間にして沸き上がった。

Dr：家に連れて帰る・・・（MSW の方を向いて）どのくらいの時間があったら準備できますか？

妻の申し出に主治医は「退院は無理だ」と言わなかった。私と同じ気持ちなのだと感じた。

MSW：家に帰りたいのですね。準備、急がないといけません。先生、最低限何が必要ですか。

Dr：点滴ですね。ポートはあるから。点滴をしてもらえば・・・そして看取り。

MSW：訪問看護と訪問診療、点滴の準備で

すね。介護は奥さんをお願いできますね。

妻・長男の前で点滴の中身、管理の方法、在宅医への依頼など医療面で必要な準備について医師・Ns・MSW で話し合った。場所を変えて話す余裕はなかった。希望をかなえられるように動きださなければならぬ。

私たちのやりとりを聞いていた妻が再び口を開いた。

妻：私たち家族は何をしたらいいのでしょうか。家に帰れますか。間に合いますか。

MSW：帰りましょう。とにかく急いで準備しましょう。ベッドがあるのですね。お父さんを寝かすお部屋にベッドを配置して、すぐに使えるようにマットレスもひいてください。それから点滴をぶらさげるところはありますか？

妻：あります。寝かせるところに点滴をつる準備すればいいのですね、わかりました。今日帰ったらすぐに準備します。（力がこもった声で長男とも目をあわせながら）

MSW：今日は木曜日。明日、金曜日。明日のうちに家に帰れるように、全力で準備します。先生、それでよろしいですか。在宅担当医へ朝一番に相談をお願いします。私は訪問看護ステーションにこれから相談します。とにかく急ぎましょう。奥さん、息子さん、一緒に頑張りましょう。お父さんに、今晚一晚頑張ってもらいましょう。それでよろしいですか？

妻：はい！わかりました。ありがとうございます。先生、よろしくをお願いします。これから少し本人に面会してもいいですか？「明日家に帰るよ」と直接本人に伝えたい

です。

Dr：いいですよ。声掛けしてあげてください。

その場に居合わせたみんなの波長がぴたり合った、そんな気がした。初めての出会いの場。かなり強気に発言したが、Gさん家族が抱えている課題の解決策はひとつしかないと感じたからだった。「帰るのは無理」という感情はなかった。私は妻・長男と一緒に病室を訪れ、Gさんに面会した。鼻に挿入されている胃管チューブからは廃液が多くあり、つらそうだった。たったいま嘔吐したとベッドサイドで病棟Nsが処置をしていた。

妻：お父さん、お父さん。今先生とお話ししてきたよ。明日、うちに帰ろう。準備してくれるって。うちに帰る許可がでたよ。つらいね、明日まで辛抱したら孫にもあえるよ。

Gさんは、妻の言葉に「うん」「うん」と答える。相当つらそうである。この状態で明日、家に帰れるかどうか・・・ひょっとしたら・・・準備が間に合わないかもしれないという思いがよぎった。いや、とにかくできるだけことはしよう、家族の希望を実現させよう、そう自分に言い聞かせた。自宅への退院をあきらめるという選択肢は私の中にはなかった。その場にいた妻、長男からも同じ思いを感じ取った。Gさんに「家に帰ってご家族と過ごせるように超特急で準備します。おうちへ明日帰りましょう。」と声をかけた。Gさんはやはり「うん」とだけ答えてくれた。

私が病室を出て、デスクに戻ったのは夕

方6時を少し過ぎていた。とにかく、明日。Gさんの希望、Gさんが家族と家で過ごせるように、準備を最優先しよう。なにからどう働きかけるか。訪問看護ステーションにはすぐに依頼の電話をした。朝いちばんでスタッフカンファレンスをと予定を立てて帰宅。家に帰ったあともGさんのことが頭から離れなかった。

そして翌朝。出勤した私を待っていたのは、「Gさんが深夜に亡くなられた」という事実だった。間に合わなかった・・・何もできなかった。心にぽっかり穴があくというのはこういうことなのだろうと思った。

その日、Gさんの主治医が私にこんな言葉をくれた。

「もう1週間早くに転院してきていれば、希望を叶えることができたと思います。残念でした。でも、ご家族から『ここに来ていろいろしてくださって(自宅への退院に向けて)考えてもらえて、よかったです。感謝しています』と言葉がありました。なんにもできなかったんですけどね。するつもりであったことは伝わったのでしょうかね。それだけでも救いですかね。一緒に考えてくれてありがとうございました。またこれからもよろしく願いいたします。」

目標は達成できなかったが、厳しい病状説明の場で家族の思いを「共感」できた瞬間を、この主治医と共有できてよかったと心から思った。

心が大きく動く瞬間がある。目の前の相手と気持ちがピタリと合うその瞬間。それ

が「共感」なのだろう。「一緒に頑張りましょう」と自然と言葉が出る。目標に向かって私はこれを、あなたはこのことを。役割分担がしっかりできて同じ土俵で踏ん張る。クライアントが決めた課題の解決策を審判しない。目標に向かってクライアントと共に前へ進む、それが対人援助の醍醐味ではないだろうか。こんな瞬間がいとおしくて、この仕事を続けてきたように思う。Gさんとの出会いは、私にこの仕事の魅力を思い起こさせてくれたと感じている。